

観光フォーラム

国連提唱の「持続可能な開発目標」 達成運動によせて

—MDGs から SDGs へ—

Understanding SDGs compared to MDGs

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

I. はじめに—本稿の課題

現在、日本を含め世界的に強力に推進されているものに、周知のように、国連提唱の「持続可能な開発目標（the Sustainable Development Goals: SDGs: 以下では SDGs という）」の達成運動がある。SDGs は、2015 年から 2030 年までにいて達成すべき 17 目標を定めたものであるが、直接的にはそれは、前身である 2015 年終了の「ミレニアム開発目標（the Millennium Development Goals: MDGs: 以下では MDGs という）」の達成運動を引き継ぐものである。

MDGs は、2000 年の「国連ミレニアム・サミット」で採択された「ミレニアム宣言（the Millennium Declaration）」を土台に、1990 年代に主要な国際会議等で採択された国際的取り組み目標を統合して、1 つの枠組みにして発足したもので、事項によると 1990 年に始まるものもあるが、2015 年までの間にいて達成すべき 8 目標を定めたものである。

この間の経緯について本稿筆者では、すでに別著（文献①）において考察している。本稿は SDGs の理解をさらに深めることを目指し、MDGs がどのような成果をもって終了したかのうえにたつて、MDGs と SDGs における立脚点の違いを比較的に明らかにし、現在における SDGs 達成運動の進展に多少とも寄与することを意図するものである。ただし本稿は、あくまでも本誌観光フォーラムを予定したものであり、SDGs 達成運動の意義にかんがみ、前記別著（文献①）を敷衍するものであることをお断わりしておきたい。

なお、これらの事柄に関する国連関係文書における用語（英語）のうち“development”は、本稿では原則として日本政府の定訳に従い“開発”としているが、本稿筆者の考え方に基づき、“発展”と訳している個所もある。また、参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. MDGs の目標達成状況と総括的コメント

MDGs については、2000 年の確定後にも例えば 2005 年

に再度ミレニアム・サミット（the Millennium + 5 Summit）が開催されるなど、“人間性と自然に関する最も緊急の問題（the most pressing problems of humanity and nature）”（A, p.955）として広く全世界的に取り組みが推進されたものであるが、MDGs のもとの 8 目標、および、およその最終的な目標達成状況は、国連文書によると、下記の通りである（U1, U4 による。ただし〔……〕は原文に基づくもの、（……）内は本稿筆者のもの。）。

目標 1 「極度の貧困と飢餓の撲滅〔Eradicate Extreme Poverty and Hunger〕」: ここで“極度の貧困”とは、1 日の収入が 1.25US ドル以下の者（当初は 1 日 1US ドル以下の者であったのが変更された）をいい、目標達成状況では、このレベルの貧困者数は全世界で、1990 年 = 19 億 2 千 6 百万人、1992 年 = 17 億 5 千 1 百万人であったところ、2015 年 = 8 億 3 千 6 百万人になっている。発展途上国では、当該国総人口の中における割合（平均）が、1990 年 = 47% から、2015 年 = 14% になっていることなどが報告されている。

目標 2 「初等教育の完全普及の達成〔Achieve Universal Primary Education〕」: 目標達成状況では、発展途上国の場合、初等教育就学率が、2000 年 = 83%〔不就学者数: 約 1 億人〕のところ、2015 年 91%〔不就学者数: 約 5 千 7 百万人〕になっていることなどが報告されている。

目標 3 「ジェンダー平等推進と女性の地位向上〔Promote Gender Equality and Empowering Women〕」: 目標達成状況では、例えば女性国会議員が 1995 年以来、90%以上の国で実現していることなどが挙げられている。

目標 4 「乳幼児死亡率の削減〔Reduce Child Mortality〕」: ここで問題とされているのは 5 歳以下の乳幼児死亡率であるが、全世界についてみると同死亡率〔生存出生（live birth）千人あたりの死亡者数〕は、1990 年には 90 人であったところ、2015 年には 43 人に減少していることなどが報告されている。

目標 5 「妊産婦の健康の改善〔Improve Maternal Health〕」: 目標達成状況では、例えば〔生児出生 10 万人につき〕死児出生が、全世界で、1990 年 = 380 人、2000 年 = 330 人のところ、

2013 年には 210 人に減っていると報告されている。

目標 6「HIV／エイズ、マalaria、その他疾病の蔓延の防止〔Combat HIV／Aids, Malaria and Other Diseases〕」：目標達成状況では、例えば新しく HIV に感染したものは、2000 年には約 3 千 5 百万人であったが、2013 年には約 2 千 1 百万人に減少していることなどが報告されている。

目標 7「環境の持続可能性の確保〔Ensure Environmental Sustainability〕」：目標達成状況では、オゾン消耗の物質が 1990 年以来急減しており、オゾンは 21 世紀中ごろまでには回復が期待されていることなどが報告されている。

目標 8「開発のためのグローバルなパートナーシップの推進〔Develop a Global Partnership for Development〕」：ここでは開発のための既発展国からの援助が取り上げられ、それが 2000 年には約 810 億 US ドルであったものが、2014 年には約 1 千 350 億 US ドルに増加していることなどが報告されている。

以上のような MDGs の達成状況の報告書では、当時の国連事務総長、潘基文の序文において総括的なコメントが簡潔に述べられている。その特徴的な諸点をここで紹介しておく（文献 U1 による）。

潘総長序文は、冒頭において「MDGs のもとに世界的な動員〔mobilization〕がなされた。それは、貧困撲滅〔anti-poverty〕について歴史上最も成功的な動きを生み出したものであった」と述べ、何よりも MDGs では第 1 の目標が貧困撲滅にあり、それにおいてそれ相応な成果のあったものであると総括しているが、同総長は続いて「しかし、すべての顕著な成果にもかかわらず、（人々の間には）不平等〔inequality〕が依然として存在すること、そして進歩〔progress〕も平等なものではなかった〔uneven〕ことは、これをはっきり知っておくべきである。貧困者は、世界の一部分に圧倒的に集中している。2011 年で見ると、世界中で極度に貧困な人々は約 10 億人を数えるが、そのうち実に約 6 割が僅か 5 か国に集中している」と述べ、貧困撲滅が依然として世界で最大の喫緊の課題であることを訴えている。

ただし同総長は、さらに続いて「持続可能な開発については、経済的、社会的、環境的な次元を統合して推進するこ

とが必要である」と述べ、持続可能な開発の 3 要素説、すなわちトリプル・ボトムライン説も有効であることに言及している。しかし同序文の最後では、今回の MDGs の成果のうえにたつて、「次の 15 年のことを考える場合、われわれが貧困を無くすために、共同の責任を負うものであることには、いささかの疑問もない」と述べ、貧困撲滅が来るべき SDGs の中心課題になることを示唆している。

そこで次に、2015～2030 年を対象にした SDGs がどのようなものであるかを考察する必要がある。

Ⅲ. SDGs の諸目標と特徴的諸点

SDGs は、2015 年 9 月 25 日の第 70 回国連総会で採択された決議「われわれは世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中で提起されたものである（文献 U2）。“2030 アジェンダ”とは 2030 年までに達成すべき課題という意味である。

この決議の「前文」には、SDGs として 17 の目標と、目標ごとに定められた計 169 のターゲットがあることが予示され、そして「これらの目標とターゲットは、ミレニアム開発目標（MDGs）を基にし、ミレニアム開発目標で達成できなかったものを全うすることを目指すものである。・・・これらの目標とターゲットは統合的で不可分のものであって、持続可能な開発の 3 側面、すなわち経済、社会および環境の 3 側面を調和させるものである」と規定されている。

さらにそのうえにたつて本文の中では、「このような広範でユニバーサルな政策目標について、世界の指導者たちが共通の行動と努力を表明したことは未だかつてなかった」。ただし「すべての国は、その固有の財産、自然資源および経済活動に対し恒久的な主権を有しており、またその権利を自由に行使するものであることを確認する」（U2,p.5）と書かれている。

SDGs の 17 の目標は、表 1 のようなものであるが、ターゲットについては、ここでは紙幅の関係で主柱的なものと、ツーリズム（観光）に直接かわるもの（計 3 ターゲット）のみを掲げている。他のターゲットは文献 U2 を見られたい。

SDGs は、MDGs とくらべると、第 1 に外観上で、8 目標で

表 1：SDGs（サステイナブル・ディベロップメント・ゴールズ）

番号	内 容 概 略
1	<p>「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」。【貧困をなくそう】</p> <p>ターゲット 1.1 「2030 年までに、現在 1 日 1.25 ドル未満で生活する人々と定義されている極度の貧困をあらゆる場所で終わらせる」。</p> <p>ターゲット 1.2 「2030 年までに、各国定義によるあらゆる次元の貧困状態にある、すべての年齢の男性、女性、子供の割合を半減させる」。</p> <p>ターゲット 1.a 「あらゆる次元での貧困を終わらせるための計画や政策を実施するべく、後発展途上国をはじめとするは発展途上国に対して適切かつ予測可能な手段を講じるため、発展協力の強化などを通じて、さまざまな供給源からの相当量の資源の動員を確保する」。</p> <p>ターゲット 1.b 「貧困撲滅のための行動への投資拡大を支援するため、国、地域および国際レベルで、貧困層やジェンダーに配慮した発展戦略に基づいた適正な政策的枠組みを構築する」。</p>

2	<p>「飢饉に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する」。【飢饉をゼロに】</p> <p>ターゲット 2.1 「2030 年までに、飢饉を撲滅し、すべての人々、特に貧困層および脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養ある食料を充分得られるようにする」。</p> <p>ターゲット 2.2 「5 歳未満の子どもの発育阻害や消耗性疾患について国際的に合意されたターゲットを 2025 年までに達成するなど、2030 年までにあらゆる形態の栄養不良を解消し、若年女子、妊婦・授乳婦および高齢者の栄養ニーズへの対処を行う」。</p> <p>ターゲット 2.4 「2030 年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水およびその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食糧生産システムを確保し、強靱（レジリエント）な農業を実践する」。</p> <p>ターゲット 2.a 「発展途上国、特に後発発展途上国における農業生産能力向上のために、国際協力の強化などを通じて、農村インフラ、農業研究・普及サービス、技術開発および植物・家畜の遺伝・バンクへの投資の拡大を図る」。</p>
3	<p>「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」。【すべての人に健康と福祉を】</p> <p>ターゲット 3.1 「2030 年までに、世界の妊産婦の死亡率を 10 万人当たり 70 人未満に削減する」。</p> <p>ターゲット 3.2 「すべての国が新生児死亡率を少なくとも出生 1,000 件中 12 件以下まで減らし、5 歳以下死亡率を少なくとも出生 1,000 件中 25 件以下まで減らすことを目指し、2030 年までに、新生児および 5 歳未満児の予防可能な死亡を根絶する」。</p> <p>ターゲット 3.6 「2020 年までに、世界の道路交通事故による死傷者を半減させる」。</p> <p>ターゲット 3.7 「2030 年までに、家族計画、情報・教育および性と生殖に関する健康の国家戦略・計画への組み入れを含む、性と生殖に関する保健サービスをすべての人々が利用できるようにする」。</p>
4	<p>「すべての人々に包摂的かつ質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」。【質の高い教育をみんなに】</p> <p>ターゲット 4.1 「2030 年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習効果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育および中等教育を修了できるようにする」。</p> <p>ターゲット 4.2 「2030 年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達支援、ケアおよび修学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」。</p> <p>ターゲット 4.3 「2030 年までに、すべての人々が男女の区別なく、手頃な価格で質の高い技術教育、職業教育および大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする」。</p> <p>ターゲット 4.4 「2030 年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事および起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる」。</p> <p>ターゲット 4.6 「2030 年までに、すべての若者および大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力および基本的計算能力を身に付けられるようにする」。</p>
5	<p>「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児にエンパワーメントを図る」。【ジェンダー平等を実現しよう】</p> <p>ターゲット 5.1 「あらゆる場所におけるすべての女性および女児に対するあらゆる差別を撤廃する」。</p> <p>ターゲット 5.2 「人身売買や性的、その他の種類の搾取など、すべての女性および女児に対する、公共・私的におけるあらゆる形態の暴力を排除する」。</p> <p>ターゲット 5.3 「未成年者の結婚、早期結婚、強制結婚および女性器切除など、あらゆる有害な慣行を撤廃する」。</p> <p>ターゲット 5.5 「政治、経済、公共分野でのあらゆるレベルの意思決定において、完全かつ効果的な女性の参画および平等なリーダーシップの機会を確保する」。</p>
6	<p>「すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」。【安全な水とトイレを世界中に】</p> <p>ターゲット 6.1 「2030 年までに、すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する」。</p> <p>ターゲット 6.2 「2030 年までに、すべての人々の、適切かつ平等な下水施設・衛生施設へのアクセスを達成し、屋外での排泄をなくす。女性および女子、ならびに脆弱な立場の人々のニーズに特に注意を向ける」。</p>
7	<p>「すべての人々に手ごろで信頼でき、かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する」。【エネルギーをみんなに、そしてクリーンに】</p> <p>ターゲット 7.1 「2030 年までに、安価かつ信頼できる現代的エネルギーサービスへの普遍的アクセスを確保する」。</p> <p>ターゲット 7.2 「2030 年までに、世界のエネルギーミックスにおける再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大させる」。</p> <p>ターゲット 7.3 「2030 年までに、世界全体のエネルギー効率の改善率を倍増させる」。</p>

8	<p>「すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する」。【働きがいも経済成長も】</p> <p>ターゲット 8.1 「各国の状況に応じて一人あたり経済成長率を持続させ、特に後発発展途上国は少なくとも年率 7% の成長率を保つ」。</p> <p>ターゲット 8.9 「2030 年までに、雇用創出、地方の文化振興・産品販売につながるツーリズム事業を促進するための政策を立案し実施する」。</p> <p>ターゲット 8.10 「国内の金融機関の能力を強化し、すべての人々の銀行取引、保険および金融サービスへのアクセスを促進・拡大する」。</p>
9	<p>「レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る」。【産業と技術革新の基礎を作ろう】</p> <p>ターゲット 9.1 「すべての人々に安価で公平なアクセスに重点を置いた経済発展と人間の福祉を支援するために、地域・越境インフラを含む質の高い、信頼でき、持続可能な強靱（レジリエント）なインフラを開発する」。</p> <p>ターゲット 9.2 「包摂的かつ持続可能な産業化を促進し、2030 年までに各国の状況に応じて雇用および GDP に占める産業セクターの割合を大幅に増加させる。後発発展途上国については同割合を倍増させる」。</p>
10	<p>「国内および国家間の不平等を是正する」。【人や国の不平等をなくそう】</p> <p>ターゲット 10.1 「2030 年までに、各国の所得下位 40% の所得成長率について、国内平均を上回る数値を漸進的に達成し、持続させる」。</p> <p>ターゲット 10.4 「税制、賃金、社会保障政策をはじめとする政策を導入し、平等の拡大を漸進的に達成する」。</p> <p>ターゲット 10.7 「計画に基づき良く管理された移住政策の実施などを通じて、秩序のとれた、安全で規則的かつ責任ある移住や流動性を促進する」。</p>
11	<p>「都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする」。【住み続けられるまちづくりを】</p> <p>ターゲット 11.1 「2030 年までに、すべての人々の、適切、安全かつ安価な住宅および基本的サービスへのアクセスを確保し、スラムを改善する」。</p> <p>ターゲット 11.2 「2030 年までに、脆弱な立場にある人々、女性、子ども、障害者および高齢者のニーズに特に配慮し、公共交通機関の拡大などを通じた安全性改善により、すべての人々に、安全かつ安価で容易に利用できる、持続可能な輸送システムへのアクセスを提供する」。</p> <p>ターゲット 11.3 「2030 年までに、包摂的かつ持続可能な都市化を促進し、すべての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な人間居住計画・管理の能力を強化する」。</p>
12	<p>「持続可能な消費と生産のパターンを確保する」。【つくる責任、つかう責任】</p> <p>ターゲット 12.1 「発展途上国の発展状況や能力を勘案しつつ、持続可能な生産に関する 10 年計画枠組み（10YEP）を実施し、発展先進国の主導の下、すべての国々が対策を講じる」。</p> <p>ターゲット 12.2 「2030 年までに、天然資源の持続可能な管理および効率的な利用を達成する」。</p> <p>ターゲット 12.3 「2030 年までに、小売・消費レベルにおける世界全体の一人あたりの食料の廃棄を半減させ、収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食料の損失を減少させる」。</p> <p>ターゲット 12.6 「特に大企業や多国籍企業などの企業に対し、持続可能な取り組みを導入し、持続可能性に関する情報を定期報告に盛り込むよう奨励する」。</p> <p>ターゲット 12.b 「雇用創出、地方の文化振興・産品販売につながる持続可能なツーリズム事業に対し持続可能な発展がもたらす影響を測定する手法を開発・導入する」。</p>
13	<p>「気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策をとる」。【気候変動に具体的な対策を】</p> <p>ターゲット 13.1 「すべての国々において気候関連災害や自然災害に対する強靱性（レジリエンス）および適応力を強化する」。</p>
14	<p>「海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する」。【海の豊かさを守ろう】</p> <p>ターゲット 14.1 「2025 年までに、海洋堆積物や富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する」。</p> <p>ターゲット 14.7 「2030 年までに、漁業、水産養殖およびツーリズムの持続的に可能な管理などを通じ、小島嶼発展途上国および後発発展途上国の海洋資源の持続的な利用による経済的便益を増大させる」。</p>
15	<p>「陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る」。【陸の豊かさを守ろう】</p> <p>ターゲット 15.a 「生物多様性と生態系の保全と持続的な利用のために、あらゆる資金源からの資金の動員および大幅な増額を行う」。</p>
16	<p>「持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する」。【平和と公正をすべての人に】</p> <p>ターゲット 16.1 「あらゆる場所において、すべての形態の暴力および暴力に関する死亡率を大幅に減少させる」。</p> <p>ターゲット 16.2 「子どもに対する虐待、搾取、取引およびあらゆる形態の暴力および拷問を撲滅する」。</p>

17	<p>「持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバルパートナーシップを活性化する」。【パートナーシップで目標を達成しよう】</p> <p>ターゲット 17.1 「課税および徴税能力の向上のため、発展途上国への国際的支援などを通じて、国内資源の動員を強化する」。</p> <p>ターゲット 17.3 「複数の財源から、発展途上国のための追加的資金源を動員する」。</p> <p>ターゲット 17.5 「後発発展途上国のための投資促進枠組みを導入し実施する」。</p>
----	--

注：各目標はゴシック体部分が本文。【……】は公式的なスローガンの表記。

出所：U2, pp.14-36, ただし 17 目標の本文邦訳文のみは U3 による。

あったものが、17 目標に拡大されているばかりではなく、取り上げ方が全体として、全般的原理的になっており、普遍妥当性を追求する観点の強いものとなっていることが注目される。これは実は、MDGs が原理的には発展途上国を対象にしたものであったのに対し、SDGs では世界全体を対象とするものになっていることに由来するところがある。

この点は、ハーバード大学のカリアリ (Caliari, A.) によると、MDGs で第 8 目標として「開発のためのグローバルなパートナーシップの推進」が掲げられていることに関連する。すなわち MDGs は、発展途上国対象のものであったから、MDGs は発展先進国の利益になるものという声があり、時の国連事務総長アナン (K. Anan) が、MDGs は国際協力のもとに行われるものであることをはっきり示すために、この第 8 目標を付け加えたものといわれる (C, p.6)。このグローバルパートナーシップ推進目標は、SDGs でも第 17 目標として提示されているが、特に MDGs の場合、全 8 目標の中ではやや異質という感があることは否めない。

もっともこの点は、MDGs と SDGs とでは、そもそも立脚する基本的な考え方に違いがあることに由来すると考えることができる。これが第 2 点であるが、例えばイクレイ (ICLEI: もともとは “International Council for Local Environmental Initiatives (国際環境自治体協議会)” といわれたものであったが、現在は “Local Governments for Sustainability- (持続可能性をめざす自治体協議会)” と改名している。ただし ICLEI という略称はそのまま) のウッドブリッジ (Woodbridge, M.) によると、SDGs は、持続可能な開発の 3 要素といわれる環境的要因、社会的要因、経済的要因が一体となってシステムを成しているという考えにたつものに対し、MDGs では、比較的にみて、これら 3 要素が別々に作用するもの (separate competing pillars) という考え方にたつ。故に MDGs の統合性を示すために、グローバルパートナーシップ推進目標をわざわざ掲げる必要があったというのである。

第 3 に、SDGs では、2013 年以降、いくつかの国 (例えば 170 か国の国会等) では、オープンな国連活動参加ワーキンググループ (UN Open Working Group: OWG) が結成されるなど、世界的に未曾有といわれる参加活動 (unparalleled participating policy process) が取り組まれたが、MDGs ではこうしたことはなく、MDGs の内容は、それまでの国際的取り決めに基づいて国連の理論家たちにより専門的にまとめられた。つまり、政策の形成過程が根本的に異なるものであった。

以上の諸点からも、ウッドブリッジによると、SDGs の達成のためには、さしあたり、次の 2 点が絶対的な必要条件となる。第 1 に、SDGs の実践には、政府以外の多くの機関や組織が参加することである。第 2 にこの場合必須的な要件となることは、関連する目標の統合性に着目することで、例えば生産と消費についても持続可能な観点から統合的にとらえ対処することが必要なもの (cross-cutting issues) と考えることである。

一方、ツーリズム論から注目されざるをえないことは、SDGs では、ツーリズムについて直接言及されているところは 3 ターゲットだけで、しかもそれは、ツーリズムの発展そのものよりも、ツーリズムの発展が貢献するであろう側面に視点が置かれたものとなっていることである。こうした事情もあり、例えばサステナブル・ツーリズム論でもプロプアー・ツーリズム (pro-poor tourism) の研究で知られる、マンチェスター・メトロポリタン大学のグッドウィン (Goodwin, H.) は、2016 年に、ツーリズム事業は全体としては SDGs の推進に貢献しているものであるにもかかわらず、この文書等ではそれが正当に評価されていないと苦情を述べ、次のように評している。

すなわちグッドウィンによると、これらの文書における記述は、何よりも貧困撲滅に志向しているプロプアー・ツーリズム方向について、「これを正しく評価しないもの (bedevil) になっている。これは端的には、関連する SDGs の諸規定、なかんずくターゲットのそれが曖昧なものであるところにみられる。そこでは、前身の MDGs の場合と同様に、対象特化性 (specific) が低く、注目を引く度合いも (noticeable) 弱いものになっている」と批判されるものである (G, pp.205-206)。

IV. おわりに—SDGs 達成運動の意義について

SDGs では、まずツーリズム分野からみると、このようにツーリズムの位置づけが低いことが注目されざるをえないが、これは、SDGs にしろ MDGs にしろ、貧困撲滅を第 1 義にするところから来るのか、あるいは、ツーリズムの役割についての理解の程度が浅いことから来るのか。改めて考えさせられるものである。ただしここでは、この点は指摘するにとどめ、本格的論議は他日の課題とさせていただく。

これと同様に、MDGs にしろ SDGs にしろ、貧困の撲滅に重点があるために、環境の維持・保全の問題については重点の度合いが低いのではないかという反論がありうる。しかし

この点は、実は、現在における持続可能な開発運動の出発点になった国連・ブルントラント委員会において、すでに根本的論議が行われているものである。

すなわち、拙著（文献Ω）で論述しているように、同委員会報告書では、環境は常に人間の欲求・ニーズのもとにあって、貧困な者が生存確保のために直接的に環境を破壊的に利用することがしばしばある。そしてこれが現今の環境にとって最大の悪化要因となっている。故に、現在の環境問題の根源的なものはここに、つまり貧困にあるとして、端的には「貧困は、グローバルな環境問題の主たる原因であり、かつ結果たるものである」と提議されているものである（W1, p.12.）

そこで、貧困撲滅の問題に戻ると、實際上ここで最大の課題となるものに、必要な資金をどのように賄うかという問題がある。前記で一言したウッドブリッジによると、SDGs 達成のための必要資金は概ね 17 兆 US ドルと試算されるものである。こうした事情も勘案して、SDGs でもグローバルパートナーシップの推進が目標の 1 つに掲げられているほか、同項目以外の目標とターゲットでも国際的な資金調達問題が提議されている。

さらにこの国連文書（文献 U2）ではこの後に「実施手段とグローバル・パートナーシップ」という章部分があり、そこにおいて「一国の発展努力は、それを可能にする国際的な経済環境によって支援されなければならない、そうした経済環境とは、首尾一貫した、互恵的な国際貿易、通貨・金融システムおよび発達した経済ガバナンスである」（U2, p.29）ことが強調されている。だが、こうした財務問題は、ウッドブリッジによれば「既発展国と発展途上国とで軋轢（dichotomy）を激化させる要因の 1 つになるかもしれない」と論評されているものである（W2, p.4）。

このような点を考えると、そもそも持続可能な開発は、始点をなすブルントラント委員会では、それを進めることによって生産力の高い社会を実現することが究極の目標とされていることが強く想起されなくてはならないのではないか（詳しくはΩ第1章）。つまりこの際、持続可能な開発のそもそもの根本的立脚点はどのようなものであったかに立ち返ることが肝要である、と考えられる。

ただしこの場合、直接の出発点にされている貧困の撲滅に対しては、それは人間の貧困撲滅だけを目的にしたものであり、人間ニーズの充足のみを願望したところの、人間エゴイズムの論理の発露であるという批判があること（詳しくはΩ、2 頁）が充分考慮されるべきである。これはかなり厳しい批判である。しかし、地球上の全生物や地球の存在そのものを含め地球全体の持続的存在を可能にするものは、少なくとも現在では、こうした生産力の向上、生産性向上という道しかないのではないか。

ちなみに、人間社会について人間がこれまで歩んできた道を、ごく簡単に、かつ極めて大局的にみると、一人でも多くの人間が人間らしく生きうように生物的医学的社会的に努力が

なされてきた歴史であったと考えられる。もとよりこれには一進一退があり、意識的に歩まれたものではない場合が多いが、一貫した歴史の法則はどのようなものであったかというレベルで考えると、極めて大筋では、要するに人間歴史はこうした動きの方向で進んできたものと考えざるをえない。そしてそれが今や地球規模で考えられる時代になった。グローバル時代の真の意味はここにあると考えられる。

これは、本稿筆者の見解では、一言でいえば、人間の持つ生産力の向上によって可能になってきたものである。すなわち生産力が低い段階では、例えば社会的に不適合とされるような者は、生物的にも当該社会から排除されるような措置が採られてきたが、生産力が高くなると、それが変わり、当該社会における生活が可能とされるようになっている。

同様なことが、特に近年では、人間以外の生物や環境的存在物にも妥当すると考えられる。少なくともその範囲は、少しずつにしろ広まっている。これは、本稿筆者の見解によれば、全体としては人間が行使する科学・技術の進歩に代表される生産力の発展の故と思われる。

旧来ではこうした生産力の向上は、人間以外のものに対する人間エゴイズムの発揮手段以外の何物でもなかった。これはいうまでもなく、人間の持つ生産力の行使の仕方が人間エゴイズムであったためである。これは、本稿筆者の見解では、ひとつには生産力の水準が低レベルにあったためと考えられる。しかし近年では、「地球全体を救え」というモットーのもとに、高度な生産力を人間以外のものの存在の確保に向ける努力が、少しずつにしろ進んでいる。すなわち、人間が展開する生産力行使の仕方が少しずつにしろ正しい方向に変わってきている。現在推進が主張されている SDGs 達成運動は、そうした方向のものと考えられる（この点が SDGs ではっきり見られるのは、例えば目標 2 のターゲット 2.4）。

SDGs の 17 目標は、大別すると、貧困の撲滅に関与するもの、不平等の撤廃にかかわるもの、および、環境の保全を含む適正なガバナンスの推進に関係するものとに分かれる。これらのものがそれぞれ直接的にはどのような要因に由来するかは別にして、既述のように、それらは一体のものとして統合された形で推進されることが肝要である。これは究極的には、生産力を向上させ、その成果を地球全体に対し適用するものと、とらえられるべきものと考ええる。

もとより現在の社会では、この運動もさらに途中において種々な多様な問題がありうる。例えばナイジェリア・イバダン大学への招聘教授でもある、イギリス・バジルドン大学のジャイエシミ（Jaiyesimi, R.）は、SDGs の実施については、アフリカ全体でみた場合、資金が重要な問題であることはいうまでもないが、直接的には、この事柄を専門的に担当できる人材（sustainability professionals）が極度に不足していることが要の問題であると訴えている（J, p.16）。資金や物品は、それを適切に扱う人材や組織がないと、宝の持ち腐れになるところか、悪用されること

もある。

こうした問題は他にいくつもあるであろうが、SDGsには以上で述べた人類史的意義のあることを提議し、ここではそれを本稿の結びの言葉としておきたい。

【参考文献】

- A: Attaran,A. (2005), An immeasurable crisis? A criticism of the Millennium Development Goals and why they cannot be measured, *PloS Medicine*, vol.2, pp.955-961.
- C: Caliri,A. (2013), Analysis of Millennium Development Goal 8: A global partnership for development, The power of numbers : A critical review of MDG : targets for human development and human rights, *Harvard School of Public Health, Working Paper Series*, May 2013.
- G: Goodwin,H. (2016), *Responsible tourism : Using tourism for sustainable development*, 2nd ed., Wolvercote: Goodfellow Publishers Ltd.
- J: Jaivesimi,R. (2016), The challenge of implementing the Sustainable Development Goals in Africa : The way forward, *African Journal of Reproductive Health*, September 2016 (special edition on SDGs), vol.20 (3), pp. 13-18.
- U1: United Nations (2015), *The Millennium Development Goals report 2015*, UN : New York.
- U2: United Nations General Assembly (2015), *Transforming our World: the 2030 Agenda for Sustainable Development*, retrieved August 20, 2016, from: http://www.un.org/ga/search/view_doc.asp?symbol.pdf (日本外務省仮訳「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」 retrieved August 20,2016, from: <http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000/01402.pdf>)
- U3: United Nations Information Centre, 「持続可能な開発目標 (SDGs) 報告 2016 (呉紅波 (国連副事務総長・経済社会問題担当))」, retrieved January 20, 2016, from:http://www.unic.or.jp/activitgeis/economic_social_development/sustainable_development
- U4: United Nations Information Centre, *Millennium Development Goals*, retrieved January 20, 2019, from : http://www.unic.or.jp/activities/economic_socail_development/social_development.pdf
- W1: WCED (1987), *Report of the World Commission on Environment and Development : Our Common Future*, retrieved January 20, 2016, from : <http://www.un.documednts.net/our-common-future.pdf> (大来佐武郎監訳『地球の未来を守るために』福武書店)
- W2: Woodbridge,M. (2015), From MDGs to SDGs : What are the Sustainable Development Goals, *ICLEI Briefing Sheet - Urban Issues*, no.1, pp.1-4.
- Ω: 大橋昭一 (2019)『サステイナブル・ツーリズムの研究—根本原理的特色を中心にした考察』和歌山大学国際観光学研究センター・研究叢書

受理日 2019 年 5 月 24 日